美少年錄 七編 五

へ13
3567
35

門 ヘ13
號 3567
巻 35

稲田大學図書館
昭34.6.3 購入
藏書

新局玉石童子訓巻之二十

東都　曲亭主人口授編次

第五十回

一名　金一藥盲亀浮木ニ遇フ

押繪福ヲ告テ成勝通能ヲ行ル

前回ニ記ス敵ヲ殺サヾリケル大江杜四郎成勝峯張楽六郎通能ハ岐嶋の山院ニ逗留の程住持の話説ニよりて世ヲ知ル上野甘樂ニ有ルヿ最多拔ヲの両村ニ武藝ニ長ル者ヨメクラベヲ見たゝと思ひ。遂ニ住持ニ別れを告げて東へ投てゆく程ニ山又山ある郡ニ。勝景勝地ヲ見ルに。岐嶋の桟梯踏見ル。現世渡の易ク。身の危ケも思合されて。川の音ニ。ゆゝ。浅隈ニ起り煙後ニ見做して夜ニ宿り日ニ又歩む路の程川中嶋ある善光寺。上下の諏訪。いへば巡る再遊料りがたければ神社佛閣漏

曲る山路の嶮岨と物とも せを素よりの急ぐの旅なるに日長き四月の時候
なるに疲れて憩ひ饑て食ふ三宿立宿日と累ねて上野甘樂に届りし日
或の茶店馬奴轎夫そこに最も扱るの両村の郡里をと問試るに絶て是と
知る者なく然る村の名をだに知らまと甘合る而已是ぞ成勝通能を
分て来れけり岐岨山里の雲ゆも似る疑の霧の離色に立心地して遊へ
去秋小らぎの海そ一法師の虚談秘と思惑ひ其宵の程逆旅主人を召
よせて又彼村の名を問に主人は一霎時沈吟して開を少錯へ申しそん
約莫その甘樂一郡に最も扱るを成勝通能と喚做したる村落にあるかさ
くやと成勝通能へいとく望を失ひて思難く惆然るに折ふ当晩合宿
る一箇の客僧隣房に在り件の問答を洩さけん哂ひ咲ふ饒しの人と
いひて間の隔亮を答とそ半分推開ひて成勝に向ひて言卒介を

無礼なれども各位の尋ゆ最も扱るの両村は部領の荘のとる人部
領とふも異名ぞ其舊の名は白猪と各位も美知るそん在昔公家一統の
御時は相撲の節會ありて當年の秋毎に諸國の力士を徴れかの其御使に
立らく部領使と唱ふ當初は上毛の白猪の郷も公家御領の部領
使に充らく官人達の知所も其頭にそあらん是に白猪の異名を
部領の荘と喚做したり然れば又その枝村に最も扱るの名を負せしを好
事の者の所為ぞあらん亦是部領に傳會せし而已昔相撲に最も扱るの
稱呼あり今の大関関脇の類なれども白猪に所云最も扱るを全く其
美ぞあらざか彼首は必秋毎に穂屋と作りて稲に寄る猪鹿を逐の故に
其地に字して穂を扱けり又蕎麥は信濃に劣らざ挽扱に宜しければ
扱と字をるの皆是正しく名にあらねば近郷の者るとも是と知れる稀

るべ。然るに和君も其地の字をのみ覚て人に問へ尋ねべしも故に
あらざや今より後に白豬とも部領と呼て尋ねべ相違あるべしと言叮
寧に説示す成勝通能歓兼て俱に膝の我むと覚ぼ果て成勝に件の
客僧に謝して云ふ我々遠く他郷に来て然る故に知らざるべ口徒に
人に問へて尋ぬる里に迷ひ人の為に笑るべく生涯悔しかるべ和尚は一字の
師なる哉最恭くして通能も俱に劣る件の荘に武士なる荘客
樵夫に至る迄角力白打に能きるも武藝に長たるもヨヨからざるや問ふに
客僧少あぐ今戦國の習俗に里の総角牛打童もとさく武藝を
嗜るあり豈只部領の壮のみならんや況も拙僧の知るるぞ那里に向て問
ふべ必分明るべ問ふを成勝もうちぜ共倍に謝して教諭大要あ
るる故部領の荘に路程這里より幾里あるべ問へ客僧然れば七

里に足らず六里に遠ず荒芽山を右方に瞻て田文の茂林より畷路を十
数町出るべ問へでも白豬に届るべと云今突鳴を遠寺の鐘を便へ
却て夜の短きを既に初更に成りに憶ぬ辯に時を移して寝まりぬと
隔亮と故の如く曳閉て开ぶ儘臥簟に入るるべ其の折も立難て傷
聞せ逆旅主人に耳新る珍説を成る貌に含笑て辭して奥へ退る
當下杜四郎成勝に通能に呟く現訛を訛を伝ふ郷談野語の解易
からぬに今に創ぬ成るべ今宵那客僧に逢ざるべ孰に溝りて白豬に到
らん歎ぶべく成通能點頭て是に思合れば御向に岐路に那住持に最
も扱るの両村に在昔秩父重忠と角觝の勝負と試る長居腹鑿に
あるべ無稽の臆説なるんと成勝然れば我も亦始より信かること
思ひ餘談に要る夜に深んと成通能に枕に就る明日の去向の遠

ねべ天明て後ふ起出ーふ彼合宿る客僧ハ我ゝ先ふ去りふけん寂とて音もせず。宿の婢妾ゞ差ゆる其早飯と果ーて主僕書餉の割合を受こゝろ身装をそ宿りを出く共侶ふ白猪を投てゆく程ふ咋ーゆゑ飲ず遠く覚て旦足日未下刻田文の茂林の頭る。畷路を過る程ふ編小る岡の下れ人ゞ寄ゝく聚合るあり。何ゆ狩ゆんと訝りて主僕倶ふ立て立稠ゝる衆人の背より覗看るふ岡の半腹ふ浅く横洞あり。洞の前ふ莚を布て年五十許る一箇の瞽者頭ゆ敗る浅葱の投頭巾を戴く。榜の故衣を被るゞ見も熟也ゆ樂器を執く。太平記を諳讀ゆて。最もゆゝ揺鳴ーたる身邊ふ一箇の少女あり。瞽者の女児るべ。年ハ二八ゆ。顔色の美ーく春の初花秋の月ゝ都ゆも稀るべく。況有恁る田舎ゆ字画ふゞも見かゝ泥の中る玉ふーあれハ朝の原の冬枯ふ一花咲る曜麥の霜ふ悩める風情ゆ秋ゝ

なくふ世ふ棄らるー。敗扇を指出ーて。群集の右より左より。袖乞ゆを哀れと見ゆ思ふ思ふゆゆあらん。衆人並く面と背けそ。鍬一文ゞもこらせざゝ成勝と通能ハゝ。ゝゝ思ハて。急ふ腰る錢嚢を探りて錢四五十を。與ゆく欲ゝれゞ。前る稠人ふ隔らまく。それゆら自由を得ざりーかゞ人皆散く後ふそゝと思ふ成勝ハ通能ふ目と注ーて退そ前面る樹下ふ茶屋あれバ立ゝりて。倶ふ発児ふ尻と撃て。媼ゞ汲りて出ーる。二碗の師茶を飲るゞゝ成勝ハ件の媼ふ白猪の路を問ふ序ふ前面ゆそ袖乞ゆ瞽者の上を諮る媼答く。他ゆハ素是流浪人ゆそ故郷ハ那里狭知らぎ侍れど。親子二人で茲ふ来ゝ。那里の洞ふ起臥ゆまゞ喫ざれバ敢喫べぎ。父親いまゞ親と敬ふゆ。大賓ふ對ふゞ如く。父親ハ衆睡らざるバ。敢枕ふ就ゝぎ。立とれハ杖を披杖け。臥とれハ其脚腰を按摩

ゑつ。稍熟睡あるを見まゝ悄地ゝ已ゞ衣を脱て。親ゝ被けて身の寒気を
覆ふ。是等人ゝ媼ゞ朝夕ゝ見てよく知る所ゝ有り。あゝ餘ゝ人情ゝ世ゝ那藉
者ゞ女児と倶ゝ這地ゝ旅宿あるゝ比ゝ両眼明亮ゝ有りけるゝ人のあゝ上帰く
撻まゝ。左右の眼を打潰され。剰前膓を打折して。廢人ゝ成りゝのみ。
其ゝ盤纏を亡ひて。せん術のゝ為ゝ隨ゝ女児と倶ゝ茲ゝ来ゝ。千剣破神の代の
穴居と秋ゝ宿ゝ似て。親ゝさらゝ可惜女児を洞ゝ起臥さるゝ。薄情や熊の
後身秋博命人ゝ侍るゝ。とゝを成勝うちゝ少て。開る苦々しゝ。
親の打擲せられゝ甚る罪ゝ知らねども。少ゞ如ゝ少女の孝行。孰秋憐
思ゝざるべゝ。然るを今群集の衆人ゞ。他ゝ屢乞れても。鐚一文ゞも取まる者
る。各々面を背けゝ是いゝる心ぞや。と再度問きて。然れども。開らゝがゝ
情由ゝ。とゝて吹笛含抗て茶鑵の下ゝ煙立ち。蒼柴の火を吹てゝ通

能も件の話説を聴て成勝ゝ向ひて。世ゝ不平のゝヨヌれども。人の
性ゝ皆善るゝ。然る孝女を見て知りて。縦些の情由ありとも並て憐ふ
者ゝ。いゝろゝ。ゝがゝ成勝然へと応へく。倶ゝ嘆息ありける。
浩りゝ程ゝ前面る。衆人ゝ皆立去りて。其頭ゝ人ゝ。ゝ食少女ゝ
父ゝ向て。今日も亦幸るゝ。物類るゝ人のあることなければ。ゝる餓させゝけ
いふせまり。とゝ不娯を聲者ゝ少ゝ。然ゝ欲ゝ知る他郷ゝ
呻吟ひ居る。我身ゝ左まれ右もあれ久後憑ゝ。梢弱草の如ゝ
艱苦ゝ一日を過さ難るゝ。恥ゝ亦足ゝ甚ゝ。一日さへ脚さへ低弱ゝ
ゝ。我命根の難面さよ。疾死ねかゝ。と思ひのゝ。我身ゝ。ゝ孰ゝ亦。
汝の資助ゝる者あらんや。と思ひ次ゝて磐蟬の生甲斐もる。命さへ猶惜
るゝ。とゝろゝ流る涙を押拭へ。少女ゝ。とゝ泣て心弱ゝ。とゝ宜ひて。

世に七轉八起といふ常言のあるなるぞや冬の枯木の雪霜に撓る枝を折らずんば花開く春に逢ふ時あり今の辛苦を後竟に昔語に做なれのなるぞやハと慰る親子の中に涙川ながら人難ても恩愛に深き心ぞ知らざりける折から部領の方よりして團子/\と聲高やかに擔櫃を背に駝做なる招牌幟を衝立/\来かける團子徑紀児を少女は急に喚駐めてやよ徑紀児達阿園一串欲けれど恥しながら今茲に阿足は二銭のほかなし二銭は明日まで貸給ひねといふを徑紀児聞もあへず噫上旨な言ひはるゝよ五文の團子を二文に賣らば明日よりいかにして我妻我子を養ふべき況和女親子は或方さまより吩咐られまして何なれ賣れぬ情由あれども倘金一分出しるゝば内緒で一串賣もせん其の一分金なくんば今更商量は無かりけり大止なと欺なくもなくまうを傍より嘲と少女は二たび喚駐めて

只其團子一串の價を一分といふことは實しからぬ噺なれども非除[illegible]壹分なれ親の饑は易かるべし今其財あるならば露宿して夜の日を送るべきならねども賣じといふことを理なく買んといふにはあらぬぞ何をかなさんと沈吟て噺に父よ見ぬなる如く質として預る東西のなきことなけれバ我黒髪をまゐらせんといひつゝ傍を見かへりて縫に包をし短刀を撈出し引抜て頭髪を剪なくなしてけるを聲者は驚慌て強よやそれ孫と喚かけて撈り寄々会留く鼻に窒りし聲苦しげにやよ糸よ今になでぬ汝の孝行親の爲とて一串の團子に換て黒髪を剪なくするは世間に儔稀なる所爲なれども生死流轉は天の命なり汝に形貌を衰させなくは異日倘彼索る人に環會ふ日のありとても何をもて分説せんや先その刃を放ちてよ然らずは我身先死なんと禁る親も禁めらるゝ女児も倶に涙さへそゞめ

かなてぞ袖濡らす外の時雨を哀れとハ。知らぬ親ゐる径紀児ハ逃るゝ
像く立去りて。忽地見えぎりふけり。あの時までも成勝通能ハ俱ふ茶
店ふ憩ひく居り。件の光景を見るふ堪へ。遠ーく茶銭幾文投
媼ふ還して走り出ず少女ふ向ひて成勝先ひけるぞう。世ふ稀なる父母の
孝順感ずるふ猶餘りあり。我们両箇も旅客ゆく。那里の茶店ふ憩ふく
在り。汝等父女の艱難を見過ーがたくまゐるべと。又ハ通能其語を次て。
我们両箇ら畫の程路ゆて河漏とたらべー於。盗子ハ故の儘ゆく在ら。
卒々是を取せんぞ爹々ふ羞めく其身の饑餓とも愈ーね猶も餘
談ありとりひろ両れ固の盗子と含ず出て遽與せハ少女ハ遽ーく刃を斂
め推隠して找をよろ件の盗子と左右のふ受戴ぶく那里の方
さ向欲知らぬ結れど思ひ分ちれ好意幾の程ふ狭ぶ忘れ給らん喃

爹々那二柱の刀祢達の飯二盗子と賜り礼禮と禀さぬゆれ。
と告るとぞ暫者い涙と斂めく。开ら辰ふらそ。這頭ふ居る里人の心
徹ハ鬼ふ似く。物の哀と知らぬやありけん。立ちり集ふハヨリけまと。物類
るいるりしふ菩提ふも優ぬあん刀徳南無阿弥陀佛。と念ーて。額
衛拜む开ぶ程ふ通能ハ茶店ふ還りて。一土瓶の茶を買りく来ぶ。汝
等是のく飯をたりべー。卒とく遽與せハ成勝も腰ふ吊たる湯飲の
椀と含ず出て是とも少女ふ取らぬく。俱ふ茶店ふ退けば媼ハ與疎ハ面
色ぬ。刀祢達刀徳ハ然ることるぐら。慈悲ハ反て冤家とるぬ。
やと嗟けり。ふ程ふ食ひし少女ハ盗子の飯と椀ふ移ーく先父ふ薦む
るふ。よく給侍して禮と乱さぬ。父親喫ぬ果て後彼身ふ僅ふ箸を抗て
二日の饑餓と愈ぬるべー。當下成勝通能ハ茶店より是を見て感嘆

此處の本文
十五百ふえんり
むら雨ふ追
きて本さ欲
ゆとてきて雫
遊仙庵琴鶴題

ゐて出て来られば食べ父母子い云云と勸めて演べ已ざりおと成勝急ふ推禁めて聲者ふ向ひて曰ふ我ら前より世ゐるの言と約ひと見て思ふ昔ハ由緒ある人ゐべ一何ゐの故ふ落魄なる方僅人の噂ふ聞く往る日人の為ふ痛く撻れて目さへ脚さへ傷られさうふあらざるや。開も所以あらんいふそやと問まさく聲者ハ嗟嘆ふ堪ず悄然として答ふ曰。既ふ知られまつり上ハ今ハ隠秘せべうもいざ。小人ゲ舊里ハ冠守紫石の畫處ゆて武弁の家ふ住しふ現乱世の悲しさハ幸ゐ世のと思ひて二世相恩の主君と二人の妻さ人早く世と去りて住果ぐうもゆらざれば契りし人と素んとて。當時ハ尚稚ゐけ。這個獨なりと倶して故郷と迷ひ遠ゆ遥遥ゆ年来を経て今茲這春當國ゐる。部領の荘と過る折小人持病の癇積起りて。一歩も運びがたければ只得其頭の客店ふ宿投りて將息ふ日を過す程ふ人ゐて我女児と如此々々の方ざ国の妾ふまらせよと。只管媒妁せらまとーかども。開ち小人ゲ情願ゐらぜ。非如饑渇ふ逼るとゐ富貴ハ家の徴めゐりともいふ。ゐて我女児と妾ふもべくもあらねば。ハの毛と以最難面答ゐ従いざりけまば媒妁人もゐち腹立ゐ。角口果ーゐ。遂ふ誣る言品傳て那里ふ逗留ゐると饒さ。小人も亦堪難て病痾瘥果れども。然らば宿りを更んとて女児と倶して立去りつ。西くとゐまぐ遠ゐ折ゐ日暮のゐゐふ追蒐来ぬる暴雄四五名媒妁人の乾児ゐらば郡司殿奴隷ゐらん那盗児と逃ゐると諸聲ふ叫りて近く伏ふ捉稠て拳を抗く打擲と狼籍朽惜ゐけれども敵ゐハヨ勢。身ハ單ゆて病痾瘥果ざれば防ぐふ由ゐくゐち悩されて両眼片脚痛痺ふ沼堪ず死活も知らぐ仕まる事の恩劇ふ懐る。盤纏の財嚢ハ盗らく約季さふ奪略らまて。ゆ人毎ハ在らぜゐゐれ然れども猶幸ふ抜女ハ恙あらぜして捉漏さ

まくうち泣く而已其頭八人家稀なれば誰とく勤る者もなし我身ら孤獨の旅客なれば訴ふべき便着もあらぬ姑且して息出れども疼痛ふ勝目へ見えぬ片脚ハ折けてせんかたなしと独女ふ扶掖れつ當晩這里まで来ふけまと猶驛路ふ遠ければ口得這洞穴ふ露宿して一宿二宿と明をのべ盤纏あらぬ故なりれば父女子ら被くる二領の衣と各一領沽却して日毎の飯ふ充るりのみ其ほ久しく支ふ見ゆる如く袖乞ども這頭も部領の米邑なれば絶く憐ふ者もなく偶過る旅客の投類る一銭をのて父女の餓餓と凌ぐふ足らねば現瓠形の日も月も我上ハ照しぬいぬやと世を不樂人と怨るまでふ嘗てのこゝろけるふ尚年弱れ刀祢達の慈恩ハ父母ふ異ならぬ南無阿弥陀佛と念ずれば女児も涙昏して嘆息れ外なりけ然れば成勝と通能ハ憂苦話説とうち吟て俱ふ嗟嘆と聲と

約ふ姑且して成勝ハ又瞽者ふ向ひて曰ふ倍ふ汝ふ患難道を守りて禍鬼ふ遇へるハ過世の業報秋天監疎なるふ似れと福福糾ふ纏の如し今こそあれ後々ハ憂を復して喜ふ做き幸もあらぬべし我ふ奇妙の仙丹あり約莫刀瘡ふて死しなるもいまだ三日を経ざる者ふ是をたやく用ふれば甦生せぬとふなるし況命ふ恙なるを其痍汚穢と拭ふが如く即效あらぬとふ者なし我所親の家傳ふて世ふ未曾有の妙丹なれば千金ふも代ることなく親族うりとも其の心正しかざるふハ敢授けぬ秘藏恁地なることぬ世ふ稀なるべき息女の孝順感心のあまり其仙丹を目今汝ふ分與んぬ然ハあれども其撲傷ハ三四日以前のものとハ見えぬ二三十日歴ぬらんふハ即效心許なけれども然りとも經験あらぬらんやいぬと腰ふ吊なる藥籠より彼仙丹を含出せば通能も凜しく懐と

掻拐りて出を圓金一枚と成勝左右に受取て彼仙丹とうち載て卒
とて少女に與れば夢狀とだろう驚くまでに少女の悦びいべうもあらぜ幾番
とうく受戴仕て。爲よ貧さ為商せ那二柱の方さまが御藥のみ欲圓やう
る。内金さへ賜りぬ禮を稟させめとれ。とらいて親のまと合りて件の圓金を
探らまれば瞽者い呆るまでに。怡悅に堪ぜ額衝て涙と共に謝しとらち。
仁人君子のい操い天の恵復い地の載るが如く通て親疎をとらい經緯史
傳に見る而已今戰國の人心小い大に併せらるる弱い強に征せらる仁義
忠孝地と拂て殘忍るらぬ平るに恁る君子に値遇しまれる幸是に
優者る。然いさるるうう千金ゆも代りとて秘藏まぬ仙丹のみ欲圓金を
添て施し賜れとて故うく受んい心に然がとく愚意と演て恵と破
らば是無禮いるせまし。と沈吟どう。女兒と喚て云云。とらべ少女とろるて。

鄭に隱れし短刀と出して親のまに渡せば瞽者い偏に措て又成勝に
向ひていふう。小人愚直の性なれば嗟来の食にあらずとも都非分の利を樂
むぜ。爲まこともの仙丹とて身の撲傷に即效あらば受まるうもいかでくるぜ。
開も這圓金を見時い父女が日毎の饑餓に充べ。寛に養生致がるるまの
故に已とて必ず恩賜の二種を受納せ。酬とらんい無礼をまとも。這短刀を
まるるまでん最恥うし。と言るがう。小人武弁の子孫にて。累世一國守に仕う
まに不幸にまて其家亡びて世ゆも人にも棄られる。今日に至るまで這短刀を
我君の夫人の紀念るとて。秘藏年来と歴ぬる甲冑に非ぬ。日夕人にも
打擲せられしとう。盤纏も紛季も失なるに幸にまるまの一刀男達に売て今猶
あり。唐山の太阿龍泉我朝の鵜丸時鳴に及ぶべくもあらざれと朝櫻の二言
銘ゆり。焼刃の殷香美しく露を帯る朝櫻に似るとらんも。由るに幸にまるに。

是まゐらせよと女兒に遞與せを成勝ヤヤと喚禁めて汗を亦要るさ口誼へ我が孝女を賞せんとそ些の資助と做せる而已報を受ん為ならんや旨人汝の清廉の人の及ぶ所にあらず然でも我本意に違ふ汗を云云とのられるべ我すまも空とるりなんの義をよくも思つぎやと聲高やうに怨ぎるを通ふ能も亦云云と俱に論じて已ざれば少女の出を聲者の困じて頭を低てをり又ひよあもみるけり當下通能に猶聲者を慰めて且のまう我前より見る所のるるかく思ふ下あり汝の撥鳴なる那樂器は何と喚做を物やらまぐ見も熟れねば問へるのとふと敷貴者うちゆて然へ那樂器は這頭に稀ぞ其名を渾不似と喚做たり嘗聞く唐山漢の王昭君が匈奴に遣嫁せられ時馬上に琵琶を抱えて出ぬ然れば彼國に在り一程琵琶をの弄びてみるを慰めるとき戎狄毎是を見て琵琶を製出をを王昭君に見せれば昭君目にうち笑ひて。おるを渾不似とらひーよる。命けて渾不似と喚做たり其形狀琉球國なる蛇皮線に似て同じからず胴に草を用ひまして張做たり桙に最太ゆゑ海老尾に琵琶に似たり是に四絃とかけて撥鳴を者即是を今後千百十數年を歴て。おの土に舶来あるを。小人陸奥に旅宿をある比市に是を見たりとあり。他國にそれらまぐ見ぎ故に浮世画に失明法師が這渾不似と搭駝する圖あり圖をる者其渾不似なると知らぎ只四弦なると訝るのを。明人の詩に渾不似と没奈何を對考へあり没奈何に飲酒磁器を受る酒と半分飲ざれば忽地に漏者。渾不似と没奈何

意と遂かさる只腹稿のふあるおの者と共に七絃とのの惜ければ浮る冊子の編中ぐ。假托しくく畧記のを。今るに春三月より小人部領の客店に逗留して病痢を療養をるとの。おるとも。這渾不似の柱に撰てあるを見やて逆旅主人に問試に主人公曰ゑ已に所藏にあらぎ或人に頼れる貴物を。久しく貴れざれ。とのい

けり。小人尚古の癖あるに價直も亦廉なれば漫に是を買合るに。旅宿の徒然を慰しむる媒妁児の口吉起りて。猛可に那里と立去るとも。渾不似る我女児の携て出けるに途に友人らの乱妨に最も難義に既しかども。渾不似に目を驚られぬ破られもせでありければ。竟に茲まで推乃来り。姨棄山の月をぞ慰めかねる衆人に銭をとる便着にあるりしと。今ぞ思へば悪因縁過世怪しくも其儒来と説諦を辨論備るりけれ成勝いふもぞらえ通能殆感嘆しぞ。盲人没へ博識るかる我憶ぞも学問ぞらと誉れ身も渾不似に愛めに狭りてもたのくまわらもべ。とふと通能ぞあぞ。不古我も旅客べれば此重荷も厭ぞに音曲素より嗜まぞ。そと世貫ぞ何ぞせん。辞ふと成勝吸禁ぞ。峯張雑譚せぞもあれ。彼よも少女よ其仙丹と蚤く参々に薦めぞや。开と用るに口偽あり。先その茱を三に分ちて。其一箇と参々に飲せよ。又一箇てば参々の両眼へ

幾番とるく紋入れて。額の痕にも冷ぞらもべ。送る一箇に脚の痛處に隈なく布れて。紙りて掩ね縦即效あらぞとも。汝の孝順参々の老実神明佛陀の冥助ぞ。験るくにあるべるぞ。ぞ〳〵とに是まぞ〳〵卒退んとそ通能とのぞ〳〵共に別れと生れへ。瞽者に少女と共に泫然とそ額衝て徳を感ト恩を謝し惜む別に一樹の蔭一河の流浅るに心汲見る成勝と通能も亦見かるく。部領の荘へぞいそぞけ。（作者曰。この立合阪の繍像に副巻四十九話に出る。看官宜く併見るべし。）却説成勝通能に立合阪を憶るく。時を移しなりければ日景の敬くを仰ぎ瞻て脚の運びとのぞ〳〵。ちくと約莫十餘町部領の郡司の邸宅に程遠るぞと豫字く白貂の坊に来ぞ程に天俄頃に結陰て。颯と降そぐ驟雨に追れて連りに走るく前面と過に見直せば彼坊の入處に乾浄る茅屋あり。柴門ぞら庭狭と雖ども松樹の梢ぞ〳〵。那里に是草庵るる狭坊賈の屋にあるべ。と思る間もるく近く隨に。その門内へ突然に

と走入りて呼門す。裏面より二八なる少女の身材高く肥たり。顔色も醜からず。太織の夾衣の轎夫袖なる黒繻子の帶幅廣く後に結び麻織の褲を穿て。苧桶を脇に持て。單打眦てありけるを思ふに成勝等を喚覺されて愕然と為て頭を抬げて。佶と見るに。誰やと問ふ當下通能は菅笠引提て拔き入りて。少女に向て告るを。我們は旅客なり。今日は這頭を過る程に急雨に追まくる推參なれども。折から下晡なれば暮るゝに程もあらぢ。今宵の宿を投めまく欲るを。許さるべきかと乞ふを少女は聞あぜ開き易かるべしとて。我家客店にあらず。況や主人は外に出て。幾還らん扨知らぬ宿は諾ひがたし。遽莫雨の霽るゝまで。笠舍り貸せとあらば。憩は安めまゝけまうゐあらぢ。意に久しからぢ。必や霽ぬらんとぶを成勝もうち笑て。開き欺べ。客人と會釋まく通能と共倡に框に尻をうち掛るに。少女は火桶の火を吹起して。茶を温めて両箇の茶碗に移して卒と成勝等に薦めるに通能も共倡に謝して其茶を喫るに。頭を旋して四下を見るに。鄙に庭狹と思ひて。東のかたは樹柱あるのみ。其頭は都て空地なれ。繁に立てる土苞あり。又其傍に小舍あり。開放たる窓の内に木刀棒棒誓古槍を。まく板壁に掛たる見て成勝も倶に是を見て言に出れど這屋主人は角觝白打の師なる者歟武藝をも兼て教るなりと猜して通能に呟けば通能屢點頭て。岐岨して。彼住持の夜話を茲に思ひ合して。逢まく欲と呟けば當下少女門内なる両箇の米苞を見出て。噫彼擔夫の心鈍さよ。鄙に誂なる精米を。厨へ入れ出せ。那首に置るやある。我身もあるに屋敷ぞ。細雨降れども濡れぬ漫へ。と獨語て。身を起して簷廊より出て。木履を疾穿て彼門内なる両箇の苞を。而を拭て最輕げに引提て庖厨のかたに出て。成勝と通能に見て齊一胆を

淡しと。悄地に感嘆あるうけ。姑且して件の少女に開かまく奥より出くるう故
處に坐と占れば通能い少女に向ひて。驚雪思ふに身の力世に有かるるかこと
ふと少女に問ふ人ぞ奴家に何ぞの膂力あらん。那首は数を作りと答て苦を績て
とう當下成勝が名を問。和女郎の謙遜深し。芳し。今日は両箇の奇事あり驚ふ
立合阪と過る時箇様々々の乞食を見う。一箇は五十有餘の男子ぞ。両眼
潰れて脚折けり。一箇は二八許なる少女なるが皆くに他郷の親子ぞ。他郷より来て
旅宿の程人の需に応ぜざりける。崇厳しく宿所と追れて剰其中途ぞ互
人等に追駆せられて。盤纏も彼季も掠攫され彼身は面部隻脚を破
られ。とう失明に成ぬ腰さえ立ねば已に死ぬ。立合阪なる洞穴中に雨路宿して往
還の人の憐愍を乞ふとのう。今ふに開ぐ女児は孝順ぞ人の及ぬ事多なれども
其頭の里人の憐まぎ。饑渇に逼りぬと。なんぞ已なる是を見ぬくに沼堪ぎ則

圓金一枚と秘蔵の仙丹を取せたり。開と今和女郎の力なるに對せるに有ねども
皆是奇事なるぬ。とのう通能も倶に驚ぎ若い彼孝女を媒妁して
事のるらぬを怨しと。互人とも罪重け他同悪を相譚ぞ。孝女の親を打擲さぞ
痍を負せるのるらぎ盤纏も行李も奪略せ。愉快と思へる狡是強盗の異
るらぬと議る國守いるぞや世の乱れを是非るけれと。聲高ぞに論ぜるを宿の少
女い傍聞け目を注せく赫れども通能為い心もつぞ。猶云云と論じけり。當下
奥より突然と出来る一箇の壮佼あり。年は十八九なるべし。身材高く肥える漢の
董卓に似ぞるん。尚額髪あれば問でも知る。小角紙なるべし。二尺七八寸なる苛物
造の一刀を跨へ。のぞもいぞ成勝と通能を尻目にかけて障子推開簷廊に出
傘引提て出く見けり。當下少女い成勝と通能に向て。身ぞ情由を
知りぬれば要るるとのい出く。禍を釀しぬ。奈ぞ養く立去りて外に宿りを求め

ゆえとゝふに成勝通能いうち驚き怪く故と問ふ少女答へて然ばよ彼旅客の少女子を媒妁せまく欲あーゝ則奴家が伯兄を角觝の綿號を韓錦樫二郎と喚做あく云。這里の主人で侍るかー又今外面へ出て来ーい奴家が第二の舍兄也ある角觝ゆいるらさるやへさく奈良櫻八重作と喚做したり。然るを此方等知りぬれば奴家が伯兄を云云と誚りぬひを怒を洩ゆて怒る堪ねば伯兄ゆ告て懲さえ事ゆ遽ーく出て来ーゆ疑ひ者ーとゝふに成勝黙頭て开ると物怪の幸ゝ我們主人ゆ面談ーて。理義を演て説諭るば竟ゆ思ひ復されく。彼孝女と其親の資助ゆるらるく事もあらん。とゝふを少女ゆ推禁めを否とよ奴家が面前の舍兄ゆ性急ゆーて人を面の教諭とゆくくもあらぬれば。ゆまご一話を交ぎーて聞詩ゆ及びるば後悔其首ゆ達がさけん其身ゆ只偽聞ゆるゆば事れ錯るゆ信るゆり彼旅客ゆ痍を負ーて盤纏も紛失も奪畧ーゆ虚詐狡實事狡知らぎ信れど开と論ーるば時ゆ穏らん疾ゆ為せめゝーと。弊ゆと通能ゆあぎ

世ゆ猟勇の者ありとも。理義ゆ勝べ兄方へ今ゆら何の恐怖あらん只這里ゆ居て主人の還るを候て面談せるゆ如かじと。慌るを成勝推禁めて开ると只匹夫の勇るらぎや孝女父子のとゝゆも憐ぶ堪へ難ども我ゆ干渉るゆるらぬゆ好と人と争ゆ。危を忘るゆ大丈夫ゆあらぎか。十三屋の豫よ敬言を忘るべらぎ。卒ゆべーとくいそぐせば少女も是とゝゆ守て身を慈去りぬゆとも。白豬の坊ゆ宿投りぬば猶安からぎ危ふりゆん。茲を出て右る岐路と十町許見ぬば前面ゆ一條の小川あり。川を渉せば新部領ゆく客店ゆ侍るゆり。其首ゆ宿りぬゆーと言語急迫ーく説示せば成勝通能欽羨て和女郎ハヨヌカのこるらぎ心操も多くゆ泊がらー。芳名を守るまゆーー名告せぬゆと請問へば少女答て数るらねども奴家ゆ押繪と喚れ侍る。身を慈いるゆるぬゆと問復されて成勝通能姓名を告り好意を謝ーて菅笠引提て立出ぎ

八幡太郎
義家
小角力
小角力

擬二郎弟子
為朝を將て夜
大江峯張
を追ふ
為朝
為朝

雨既に歇て雲いまゞ斂らぎ是時黄昏なりけれ幾程もなく日も暮たり。
是日八月十四日にて月の出べき時候なれども朦朧る路と連れ
急くものから短夜なれば初更の時候に件の河原に来て見れば船は前
面の岸に在り。呼ども〳〵船公の応るけはいなく只得一番妻時立住程に
後方遥に人許り追蒐来る蕉火の光り幽に見えけり。此も是甚る
人ぞや。开ら亦巻を更めて。且下回に解分るを聴給へ。

終

繡像畫工 代稿

一陽齋後豊國 陽

澤正次

浮書筆畊

巻之十六十七十八 九
巻之十九二十 谷 吉金 知川

新局玉石童子訓第五板

第自五十一回 推續紀
第至五十五回 五巻 開板

繡像復讐石見英雄録 全部 五十冊

南溟 玉藻 主人 編輯
浪花 一蝶斎 画 歌川芳梅 画

○初編 系師 人作 七冊 ○二編 玉藻主人嗣著 ○三編 泉陽子嗣著 ○第四輯以下作者一家
永禄天正の頃筑紫名嶋の豪士岩見重太郎橘種李が生さちより武者修行
セー世の武功大蛇の害を除き老鯉の妖を殺めー勇威を振め後は天の擣立ふさ
廣徹成敗大川お三人の大敵を殺て兄弟の怨恨を晴し絶ふ室町殿に奉仕て任官
ー鈴木主水正の義勇抜る事同じ事蜜峯嘉が女邪淫婦岩瀑孝女新月ホゞす
鈴木重の五雄と称する豪士の列伝霊猿悪魚の怪談ホ五輯よりハ益入佳境新話多り

浪花書肆

蘭久寶寺町心齋橋北ヘ入

伊丹屋善兵衛 板